

庵丁、杓子、わり薪等の五種をならべて、七種の數に合せ、そのうちの杓子、或は播槌などにて打はやすなり、その打ばやす時の祝詞關東にてはな、くさなすな、唐土の鳥と、日本の鳥と、渡らぬ先に、といへるを、備後の福山にては、唐土の鳥の、日本の土地へ、渡らぬ先に、といへり、これは歲時記に、正月夜多鬼鳥度家々、搥牀、打戸、振狗耳、滅燈燭禳之、といへるにや、似たり、岡村尙謙曰、公事根源に、延喜の時、後院より七種の若菜を奉りしといひしは、恐くは一條禪閣の傳説をかきゑるされしにて、其實は延喜御記にいへるが如く、たゞ若菜のみを奉りしものなるべし、されば今、權司の供御所より奉る七種の御粥は、齋を少しまじへて奉ると春の七種考七いへり、これは却て延喜の頃の遺風にてもあるべきにや、御形、田平子、佛座などいへる名は、まさしく後の世の俗稱にて、延喜式、新撰字鏡、和名鈔等には、その名なきにても、七種のわかなは、延喜の頃のものにはあらざることとゑられたり、もしその頃のものにて、いづれの野にも、冬より春かけて、よく生出るものは、芹、齋を俗にいふはき根也、娘菜根也、おほばこ、うつぼくさ、草、夏枯は、こはこべら、これや七種にてもありぬべし、されど文德實錄、日本後紀等の諸書に、絶てその事のなきをみれば、いづれにも延喜の頃には、七種の若菜を奉りしものにては、あるべからずといへり、これまた草説なり、

〔梅園日記〕七草 世説、故事苑に七草を搥事、事文類聚に歲時記を引て曰、正月七日多鬼車鳥度家々、搥門、打戸、滅燈燭禳之、和俗七種菜を打つ唱に、唐土の鳥、日本の鳥、渡らぬさきにと云るは、此鬼車鳥を忌意なり、板を打鳴すは、鬼車鳥不止やうに禳也といへり、按ずるに、此説是なり、桐火桶定家卿すに、正月七日七草をた、くに七づ、七度四十九た、く也、七草は七星なり、四十九た、くは七曜、九曜、廿八宿、五星合て四十九の星をまつる也、唐土の鳥と、日本の鳥と、わたらぬさきに、七草なづな、手につみいれて、亢背斗張とあり、亢背斗張は、廿八宿の中の星の名なり、また旅宿問答に、七日の七草は、在天七星、星の名を書て、鬼車鳥の類の天鳥を逐事は、周禮秋官に、蒼蒺氏掌覆天鳥之巢、以